

芥川龍之介

澄江堂雜記



澄江堂雜記

大雅の画

僕は日頃大雅の画を欲しいと思っっている。しかしそれは大雅でさえあれば、金を惜まないと云うのではない。

まあせいぜい五十円位の大雅を一幅得たいのである。

大雅は偉い画描きである。昔、高久たかひさあいがい靄崖は一文無しの

窮境にあつても、一幅の大雅だけは手離さなかつた。あ

あ云う英靈漢えいれいかんの筆に成つた画は、何百円と雖いえども高い事

はない。それを五十円に値切りたいのは、僕に余財のな

い悲しさである。しかし大雅の画品を思えば、たとえば五百万円を投ずるのも、僕のように五十円を投ずるのも、安いと云う点では同じかも知れぬ。芸術品の価値も小切手や紙幣に換算出来ると考えるのは、度し難い俗物ばかりだからである。

Samuel Butler の書いた物によると、彼は日頃「出来の好い、ちゃんと保存された、四十シリング位のレムブラント」を欲しがっていた。処が実際二度までも莫迦ぼかに安いレムブラントに遭遇した。一度は一磅ポンドと云う価の為に買わなかったが、二度目には友人の Gogin に諮はかった

上、とうとうそれを手に入れる事が出来た。その画はど
う云う画だったか、どの位の金を払ったか、それはどち
らも明らかではない。が、買った時は千八百八十七年、
買った場所はストランド（ロンドン）の或^{ある}質店の店さき
である。

こう云う先例もあつて見ると、五十円の大雅を得んと
するのは、必しも不可能事ではないかも知れぬ。何処か
寂しい町の古道具屋の店に、たった一幅売り残された、
九^{きゆう}霞^か山^{さん}樵^{しやう}の水墨山水——僕は時々退屈すると弥^み勒^{ろく}の出
世でも待つもののように、こんな空想にさえ耽る事があ

る。

にきび

昔「羅生門」と云う小説を書いた時、主人公の下人の頬には、大きい面皰にきびのある由を書いた。当時は王朝時代の人間にも、面皰のない事はあるまいと云う、謙遜すれば当推量に拠ったのであるが、その後「左経記さけいき」に二君とあり、二君又は二禁なるものは今日の面皰である事を知った。二君等は勿論当て字である。尤もつともこう云う発

見は、僕自身に興味がある程、傍人には面白くも何ともあるまい。

将軍

官憲は僕の「将軍」と云う小説に、何行も抹殺を施した。処が今日の新聞を見ると生活に窮した廃兵たちは、「隊長殿にだまされた閣下連の踏台」とか、「後顧するなど大うそつかれ」とか、種々のポスタアをぶら下げながら、東京街頭を歩いたそうである。廃兵そのものを抹

殺する事は、官憲の力にも覺束ないらしい。

又官憲は今後と雖も、「〇〇〇の〇〇〇に〇〇〇の念を失わしむる」物は、発売禁止を行うそうである。〇〇〇の念は恋愛と同様、虚偽の上に立つ事の出来るものではない。虚偽とは過去の真理であり、今は通用せぬ藩札の類である。官憲は虚偽を強いながら、〇〇〇の念を失うなと云う。それは藩札をつきつけながら、金貨に換えろと云うのと変りはない。

無邪気なるものは官憲である。

毛生え薬

文芸と階級問題との関係は、頭と毛生え薬との関係に似ている。もしちゃんと毛が生えていれば、必しも塗る事を必要としない。又も^{また}し禿げ頭だったとすれば、恐らくは塗っても利^きないであろう。

芸術至上主義

芸術至上主義の極致はフロオベルである。彼自身の言

葉によれば、「神は万象の創造に現れているが、しかも人間に姿を見せない。芸術家が創作に対する態度も、亦また斯くの如くなるべきである。」この故にマダム・ボヴァリイにしても、ミクロコスモスは展開するが、我々の情意には訴えて来ない。

芸術至上主義、——少くとも小説に於ける芸術至上主義は、確かに欠伸あくびの出易いものである。

一切不捨

何の某は帽子ばかり上等なのをかぶっている。あの帽子さえなければ好いのだが、——こう云う言葉をなす人がある。しかしその帽子を除いたにしても、何の某の服装なるものは、寸分も立派になる次第ではない。唯貧しげな外觀が、全体に蔓延まんえんするばかりである。

何の某の小説はセンチメンタルだとか、何の某の戯曲はインテレクチュアルだとか、それらはいずれも帽子の場合と、選ぶ所のない言葉である。帽子ばかり上等な

るものは、帽子を除き去る工夫をするより、上着もズボンも外套も、上等ならしむる工夫をせねばならぬ。センチメンタルな小説の作者は、感情を抑える工夫をするより、理智を活かすべき工夫をせねばならぬ。

これは独り芸術上の問題のみではない。人生に於ても同じ事である。五欲の克服のみに骨を折った坊主は、偉い坊主になつた事を聞かない。偉い坊主になつたものは、常に五欲を克服すべき、他の熱情を抱き得た坊主である。雲照さえ坊主の羅切らせつを聞いては、「男根は須すべからく隆々たるべし」と、弟子共に教えたと云うではないか？

我等の内にある一切のものはいやが上にも伸ばさねばならぬ。それが我等に与えられた、唯一の成仏じようぶつの道である。

赤西蠣太

或時志賀直哉氏の愛読者と、「赤西蠣太の恋」の話をした事がある。その時僕はこんなことを云った。「あの小説の中の人物には栄螺さざえとか鱒次郎ますじろうとか安甲あんこうとか、大抵魚貝の名がついている。志賀氏にもヒユウモラス・サイ

ドはないのではない。」すると客は驚いたように、「成程そうですね。そんな事には少しも気がつかずにいました」と云った。その癖客は僕なぞよりも「赤西蠣太の恋」の筋をはつきり覚えていたのである。

客は決して軽薄児ではない。学問も人格も兼備した、寧ろ珍しい文芸通である。しかもこの事実気づかなかつたのは、志賀氏の作品の型とでも云うか、兎とに角かく何時か頭の中にそう云う物を拵えた上、それに囚われていた為であろう。これは独り客のみではない。我々も気をつけねばならぬ事である。

釣名文人

古来作家が本を出した時、その本の好評を計る為に、新聞雑誌に載るべき評論を利用する事は稀ではない。中には手加減を加えるどころか、作者自身然るべき匿名のもとに、手前味噌の評論を書いたのもある。

ド・ラ・ロシュフウコオルは名高い格言集の作家である。処がサント・ブウヴの書いたものによると、この人さえ「ジュルナル・デ・サヴァン」に出た評論には、

彼自身修正を施したらしい。しかも「ジュールナル・デ・サヴァン」は、当時発行された唯一の新聞であり、その評論の載ったのは、千六百六十五年三月九日だと云うのだから、作家の評論を利用するのも、ずいぶん淵源は古いものである。僕はロシユフウコオルの格言を思いながら、この記事を読んだ時、実際苦笑せずにはいられた。か。つ。た。それを思えば日本の文壇は、新開地だけに悪風も少い。売笑批評とか仲間褒め批評とか云つても、まず害毒は知れたものである。

因に云う。この評論の筆者はマダム・ド・サブレ、評

論されたのは例の格言集である。

歴史小説

歴史小説と云う以上、一時代の風俗なり人情なりに、多少は忠実でないものはない。しかし一時代の特色のみを、——殊に道德上の特色のみを主題としたものもあるべきである。たとえば日本の王朝時代は、男女関係の考え方でも、現代のそれとは大分違う。其処を宛然えんぜん作者自身も、和泉式部の友だちだったように、虚心平気に書き

上げるのである。この種の歴史小説は、その現代との対照の間に、自然或暗示あるを与え易い。メリメのイザベラもこれである。フランスのピラトもこれである。

しかし日本の歴史小説には、未だこの種の作品を見ない。日本のは大抵古人の心に、今人の心と共通する、云わばヒュマンな閃きを捉えた、手っ取り早い作品ばかりである。誰か年少の天才の中に、上記の新機軸を出すものはいないか？

世人

西洋雑誌の載せる所によると、二十一年の九月巴^パ里にアナトオル・フランスの像の建った時、彼自身その除幕式に演説を試みたと云う事である。この頃それを読んでみると、こう云う一節を発見した。「わたしが人生を知ったのは、人と接触した結果ではない。本と接触した結果である。」しかし世人は書物に親しんでも、人生はわからぬと云うかも知れない。

ルノアルの言った言葉に、「画を学ばんとするものは

美術館に行け」とか云うのがある。しかし世人は古名画を見るよりも、自然に学べと云うかも知れない。

世人とは常にこう云うものである。

火渡りの行者

社会主義は、理非曲直の問題ではない。単に一つの必然である。僕はこの必然を必然と感じないものは、あたか恰も火渡りの行者を見るが如き、驚嘆の情を禁じ得ない。あの過激思想取締法案とか云うものの如きは、正にこの

好例の一つである。

俊寛

「平家物語」や「源平盛衰記」以外に、俊寛の新解釈を試みたものは現代に始まった事ではない。近松門左衛門の俊寛の如きは、最も著名なものの一つである。

近松の俊寛の島に残るのは、俊寛自身の意志である。

たんのさえもんのじようもとやす
丹左衛門尉基康は、俊寛、成経、康頼等三人の赦免状しやめんじようを携えている。が、成経の妻になった、島の女千鳥だけ

は、舟に乗る事を許されない。正使基康には許す気があつても、副使の妹尾せのおが許さぬのである。妻子の死を聞いた俊寛は、千鳥を船に乗せる為に、妹尾太郎を殺してしまふ。「上使を斬りたる咎とがによつて、改めて今鬼界が島の流人となれば、上の御慈悲の筋も立ち、御上使の落度いささかなし。」この英雄的な俊寛は、成経、康頼等の乗船を勧めながら、従容しやうようと又こつとも云うのである。「俊寛が乗るは弘誓ぐぜいの船、浮き世の船には望みなし。」

僕は以前久米正雄と、この俊寛の芝居を見た。俊寛は故人段四郎、千鳥は歌右衛門、基康は羽左衛門、——他

は記憶に残っていない。俊寛が乗るは云々の文句は、当時大いに久米正雄を感心させたものである。

近松の俊寛は「源平盛衰記」の俊寛よりも、遙かに偉い人になっている。勿論舟出もちろんを見送る時には、嘆き悲しむのに相違ない。しかしその後は近松の俊寛も、安らかに余生を送ったかも知れぬ。少くとも「盛衰記」の俊寛程、悲しい末期には遇わなかったであろう。——そう云う心もちを与える限り、「苦しまざる俊寛」を書いたものは、夙つとに近松にあったと云うべきである。

しかし近松の目ざしたのは、「苦しまざる俊寛」にの

みあつたのではない。彼の俊寛は「平家女護が島」の登場人物の一人である。が、倉田、菊池両氏の俊寛は、俊寛のみを主題としている。鬼界が島に流された俊寛は如何に生活し、又如何またに死を迎えたか？——これが両氏の問題である。この問題は殊に菊池氏の場合、こう云う形式にも換えられるであろう。——「我等は俊寛と同じように、島流しの境遇に陥った時、どう云う生活を営むであらうか？」

近松と両氏との立ち場の相違は、「盛衰記」の記事の改めぶりにも、窺われると云う事を妨げない。近松はあ

の俊寛を作る為に、俊寛の悲劇の關鍵かんけんたる赦免状の件くだりさえも変更した。両氏も勿論近松に劣らず、「盛衰記」の記事を無視している。しかし両氏とも近松のように、赦免状の件は改めていない。与えられた条件の内に、俊寛の解釈を試みる以上、これだけは保存せねばならぬからである。

丁度その場合と同じように、倉田氏と菊池氏との立ち場の相違も、やはり「盛衰記」の記事を変更した、その変更のし方に見えるかも知れぬ。倉田氏が俊寛の娘を死ほうよくんだ事にしたたり、菊池氏が島を豊沃ほうよくの地にしたたり、――

それらは皆両氏の俊寛、——「苦しめる俊寛」と「苦し
まざる俊寛」とを描出するに便だった為であろう。僕の
俊寛もこの点では、菊池氏の俊寛の蹤あとを追うものである。
唯菊池氏の俊寛は、寧むしろ外部の生活に安住の因を見出し
ているが、僕のは必しもそればかりではない。

しかし謡や浄瑠璃にある通り、不毛の孤島に取り残さ
れた儘、しかもなお悠々たる、偉い俊寛を考えられぬで
はない。唯この巨鱗きよりんを捉える事は、現在の僕には出来ぬ
のである。

附記 「盛衰記」に現れた俊寛は、機智に富んだ思想

家であり、鶴の前を愛する色好みである。僕は特にこの点では、「盛衰記」の記事に忠実だった。又俊寛の歌なるものは、康頼や成経より拙いようである。俊寛は議論には長じていても、詩人肌ではなかったらしい。僕はこの点でも、「盛衰記」に忠実な態度を改めなかった。又「盛衰記」の鬼界が島は、たといタイテイではないにしても、満更岩ばかりでもなさそうである。もしあの「盛衰記」の島の記事から、辺土に対する都会人の恐怖や嫌悪を除き去れば、存外古風土記にありそうな、愛すべき島になるかも知れない。

漢字と仮名と

漢字なるものの特徴はその漢字の意味以外に漢字そのものの形にも美醜を感じさせることだそうである。仮名は勿論使用上、音標文字の一種たるに過ぎない。しかし「か」は「加」と云うように、祖先はいずれも漢字である。のみならず、いつも漢字と共に使用される関係上、自然と漢字と同じように仮名そのものの形にも美醜の感じを含み易い。たとえば「い」は落ち着いている、「り」

は如何にも鋭いなどと感ぜられるようになり易いのである。

これは一つの可能性である。しかし事實はどうであろう？

僕は実は平仮名には時々形にこだわることがある。たとえば「て」の字は出来るだけ避けたい。殊に「何々して何々」と次に続けるのは禁物である。その癖「何々している。」と切れる時には苦にならない。「て」の字の次は「く」の字である。これも丁度折れ釘のように、上の文章の重量をちゃんと受けとめる力に乏しい。片仮名

は平仮名に比べると、「ク」の字も「テ」の字も落ち着いてあるいいる。或は片仮名は平仮名よりも進歩した音標文字なのかも知れない。或は又平仮名に慣なれている僕も片仮名には感じが鈍いのかも知れない。

希臘末期の人

この頃エジプトの砂の中から、ヘラクレニウムの熔岩の中から、希臘人ギリシアの書いたものが発見される。時代は350 B.C. から 150 B.C. 位のものらしい。つまりアテネ

時代からロオマ時代へ移ろうとする中間の時代のもの
である。種類は論文、詩、喜劇、演説の草稿、手紙——ま
だ外にもあるかも知れない。作者は従来書いたものの少
しは知られていた人もある。名前だけやっと伝っていた
人もある。勿論全然名前さえ伝わっていなかった人もあ
る。

しかしそれは兎も角も、そういう断簡零墨を近代語に
訳したものをみると、どれもこれも我々にはお馴染みの
思想ばかりである。たとえば *Polystratus* と云うエピク
ロス派の哲学者は「あらゆる虚偽と心労とを脱し、人生

を自由ならしむる為には万物生成の大法を知らなければならぬ」と論じている。そうかと思えば *Cercidas* と云う所謂犬儒派の哲学者は「蕩児と守銭奴とは黄白に富み、予ばかり貧乏するのは不都合である！……正義は土豚のように盲目なのか？ *Themis*（正義の女神）の明は蔽われているのか？」と大いに憤慨を洩らした後、「遮莫我徒は病弱を救い、貧窶を恵むことを任にしたい」と勇ましい信念を披露している。更に又彼に先立つこと三十年余と伝えられる *Colophon* の *Phoenix* は「何びとも金持ちには友だちである。金さえあれば神々さえ必ず君を

愛するであろう。が、万一貧しければ母親すら君を憎むであろう」と諷刺に満ちた詩を作っている。最後に Enoande の Diogenes は「予の所見に従えば、人類は百般の無用の事に百般の苦楚を味っている。……予は既に老人である。生命の太陽も沈もうとしている。予は唯予の道を教えるだけである。……天下の人はこたはら悉く互に虚偽を移し合っている。丁度一群の病羊のように」と救援の道を教えている。

こう云う思想はいつの時代、どこの国にもあったものと見える。どうやら人種の進歩などと云うのは蛞蝓の歩

みに似ているらしい。

比 喩

メタフォアとかシミリイとかに文章を作る人の苦勞するのには遠い西洋のことである。我々は皆せち辛い現代の日本に育っている。そう云うことに苦勞するのは勿論、兎に角意味を正確に伝える文章を作る余裕さえない。しかしふと目に止まった西洋人の比喩の美しさを愛する心だけは残っている。

「ツインガレラの顔は脂粉に荒らされている。しかしその皮膚の下には薄氷の下の水のように何かはまだかすかに仄めいている。」

これは Wassermann の書いた売笑婦ツインガレラの肖像である。僕の訳文は拙いのに違いない。けれどもむかし Guys の描いた、優しい売笑婦の面影はありありと原文に見えるようである。

告白

「もつと己れ的生活を書け、もつと大胆に告白しろ」
とは屢しばしば、諸君の勧める言葉である。僕も告白をせぬ訳ではない。僕の小説は多少にもせよ、僕の体験の告白である。けれども諸君は承知しない。諸君の僕に勧めるのは僕自身を主人公にし、僕の身の上についた事件を臆面もなしに書けと云うのである。おまけに巻末の一覧表には主人公たる僕は勿論、作中の人物の本名仮名をずらりと並べると云うのである。それだけは御免を蒙らざるを

得ない。――

第一に僕はもの見高い諸君に僕の暮しの奥底をお目にかけるのは不快である。第二にそう云う告白を種に必要以上の金と名とを着服するのも不快である。たとえば僕も一茶のように交合記録を書いたとする。それを又「中央公論」か何かの新年号に載せたとする。読者は皆面白がる。批評家は一転機を来したなどと褒める。友だちは、いよいよ愈いよいよ裸になったなどと、――考えただけでも鳥肌になる。ストリンドベルクも金さえあれば、「痴人告白」は出さなかつたのである。又出さなければならなかつた時に

も、自国語の本にする気はなかつたのである。僕も愈、食われぬとなれば、どう云う活計を始めるかも知れぬ。その時はおのずからその時である。しかし今は貧乏なりに兎に角露命を繋いでいる。且かつ又体は多病にもせよ、精神状態はまずノルマルである。マゾヒスムスなどの徴候は見えない。誰が御苦勞にも恥じ入りたいことを告白小説などに作るものか。

チャプリン

社会主義者と名のついたものはボルシエヴィツキたる
と然らざるとを問わず、ことごと悉く危険視されるようである。
殊にこの間の大地震の時にはいろいろその為に崇られた
らしい。しかし社会主義者と云えば、あのチアアライ・
チアプリンもやはり社会主義者の一人である。もし社会
主義者を迫害するとすれば、チャプリンも亦また迫害しなけ
ればなるまい。試みに某憲兵大尉の為にチアプリンが殺
されたことを想像して見給え。あひる家鴨歩きをしているうち

に突き殺されたことを想像して見給え。苟くも一たびいやしフィルムの上に彼の姿を眺めたものは義憤を発せずにはいられないであろう。この義憤を現実に移しさえすれば、——兎に角諸君もブラック・リストの一人になることだけは確かである。

あそび

これは「サンデー毎日」所載、福田雅之助君の「最近の米国庭球界」の一節である。

「テイルデンは指を切ってから、却って素晴らしい当りを見せる様になった。なぜ指を切ってからの方が、以前よりうまくなったかと云うに、一つは彼の気が緊張しているからだ。彼は非常に芝居気があつて、勝てるマツチにもたやすく勝とうとはせず、或程度まで相手をあしらつて行くらしかったが、今年度は「指」と云うハンデイキヤツプの為に、ゲエムの始めから緊張してかかるから、尚更強いのである……」

ラケットを握る指を切断した後、一層腕を上げたテイルデンはまことに偉大なる選手である。が、指の満足だ

った彼も、——同時に又^{また}相手を翻弄する「あそび」の精神に富んでいた彼も必しも偉大でないことはない。いや、僕はテイルデン自身も時々はちよつと心の底に、「あそび」の精神に富んでいた昔をなつかしがっていはしなにかと思つている。

塵 勞

僕も大抵の売文業者のように匆忙たる暮しを営んでい
る。勉強も中々思うようには出来ない。二、三年前に読み

たいと思つた本も未だに読まずにいる始末である。僕は又こう云う煩いは日本にばかりあることと思つていた。が、この頃ふと「レミ・ド・グルモン」のことを書いたものを読んだら、グルモンはその晩年にさえ、毎日ラ・フランスに論文を一篇、二週間目に「メルキュウル」に対話を一篇書いていたらしい。すると芸術を尊重する仏フ蘭西ランスに生れた文学者も甚はなはだ清閑には乏しい訳である。日本に生れた僕などの不平を云うのは間違いかも知れない。

イバネス

イバネス氏も日本へ来たそうである。滞在日数も短かったし、まあ通り一ぺんの見物をすませただけである。イバネス氏の評伝には Camille Pitollat の V. Blasco-Ibáñez, Ses romans et le roman de sa vie など云う本も流行している。と云って読んでいる次第ではない。唯二、三年前の横文字の雑誌に紹介してあるのを読んだだけである。

「わたしの小説を作るのは作らずにはいられない結果

である。……わたしは青年時代を監獄に暮した。少くとも三十度は入獄したであろう。わたしは囚人だったこともある。度たび野蠻な決闘の為に重傷を蒙ったこともある。わたしは又人間の堪え得る限りの肉体的苦痛を嘗めている。貧乏のどん底に落ちたこともある。が、一方には代議士に選挙されたこともある。土耳其トルコのサルタンの友だちだったこともある。宮殿に住んでいたこともある。それからずっと鉅万の金を扱う実業家にもなっていた。亜米利加アメリカでは村を一つ建設した。こう云うことを話すのはわたしは小説を生活の上に実現出来ることを示す為で

ある。紙とインクとに書き上げるよりも更に数等巧妙に実現出来ることを示す為である。」

これはピトオレエの本の中にあるイバナス氏自身の言葉だそうである。しかし僕はこれを読んでも、文豪イバナス氏の云うように、格別小説を生活の上に実現していると云う気はしない。するのは唯小説の広告を実現していると云う気だけである。

船長

僕は上海へ渡る途中、筑後丸の船長と話をした。政友会の横暴とか、ロイド・ジョージの「正義」とかそんなことばかり話したのである。その内に船長は僕の名刺を見ながら、感心したように小首を傾けた。

「アクタ川と云うのは珍らしいですね。ははあ、大阪毎日新聞社、——やはり御専門は政治経済ですか？」

僕は好い加減に返事をした。

僕等は又^{また}少時の後、ボルシェヴィズムか何かの話をし

出した。僕は丁度その月の「中央公論」に載っていた誰かの論文を引用した。が、生憎船長は中央公論の読者ではなかった。

「どうも「中央公論」も好いですが、——」

船長は苦にがしそうに話しつづけた。

「小説を余り載せるものですから、つい買い渋ってしまうのです。あれだけはやめる訳に行かないものでしょうか？」

僕は出来るだけ情けない顔をした。

「そうです。小説には困りますね。あれさえなければ

と思うのですが。」

爾来僕は船長に格別の信用を博したようである。

相撲

「負けまじき相撲を寝ものがたりかな」とは名高い蕪村の相撲の句である。この「負けまじき」の解釈には思いの外異説もあるらしい。「蕪村句集講義」によれば虚子、碧梧桐両氏、近頃は又木村架空氏も「負けまじき」を未来の意味としている。「明日の相撲は負けてはなら

ぬ。その負けてはならぬ相撲を寝ものがたりに話している。」——と云うように解釈するのである。僕はずっと以前から過去の意味にばかり解釈していた。今もやはり過去の意味に解釈している。「今日は負けてはならぬ相撲を負けた。それをしみじみ寝ものがたりにしている。」——と云うように解釈するものである。もし将来の意味だったとすれば、蕪村は必ず「負けまじき」と調子を張った上五の下へ「寝ものがたりかな」と調子の延びた止めを持って来はしなかつたであろう。これは文法の問題ではない。唯「負けまじき」をどう感ずるかと云う芸術

的触角の問題である。尤も^{もつと}「蕪村句集講義」の中でも、子規居士と内藤鳴雪氏とはやはり過去の意味に解釈している。

「とても」

「とても安い」とか「とても寒い」と云う「とても」の東京の言葉になり出したのは数年以前のことである。勿論「とても」と云う言葉は東京にも全然なかった訳ではない。が従来の用法は「とてもかなわない」とか「と

ても纏まらない」とか云うように必ず否定を伴っている。肯定に伴う新流行の「とても」は三河の国あたりの方言であろう。現に三河の国の人のこの「とても」を用いた例は元禄四年に上梓された「猿蓑」の中に残っている。

秋風やとても芒はうごくはず

三河、子尹

すると「とても」は三河の国から江戸へ移住する間に二百年余りかかった訳である。「とても」手間どったと云う外はない。

猫

これは「言海」の猫の説明である。

「ねこ、（中略）人家ニ畜フ小サキ獣。人ノ知ル所ナリ。溫柔ニシテ馴レ易ク、又能ク鼠ヲ捕フレバ畜フ。然レドモ窃盗ノ性アリ。形虎ニ似テ二尺ニ足ラズ。（下略）」

成程猫は膳の上の刺身を盗んだりするのに違いはない。が、これをしも「窃盗ノ性アリ」と云うならば、犬は風俗壊乱の性あり、燕は家宅侵入の性あり、蛇は脅迫

の性あり、蝶は浮浪の性あり、鮫は殺人の性ありと云つても差支えない道理であろう。按ずるに「言海」の著者大槻文彦先生は少くとも鳥獣魚貝に対する誹毀ひきの性を具えた老学者である。

版数

日本の版数は出たらめである。僕の聞いた風説によれば、或相当あるの出版業者などは内務省への献本二冊を一版に数えているらしい。たといそれは謔としても、今日の

ように出たらめでは、五十版百版と云う広告を目安に本を買っている天下の読者は愚弄されているのも同じことである。

尤も仏蘭西の版数さえ甚だ当てにならぬものだそうである。例えばゾラの晩年の小説などは二百部を一版と号していたらしい。しかしこれは悪習である。何も香水やオペラ・バッグのように輸入する必要はないに違いない。且かつ又メルキュルは出版した本に一々何冊目と記したこともある。メルキュルを学ぶことは困難にしる、一版を何部と定めた上、版数も偽らずに広告することは当然

日本の出版業組合も厲行して然るべき企てであろう。いや、こう云う見易いことは賢明なる出版業組合の諸君のとうに気づいている筈である。するとそれを実行しないのは「もし佳書を得んと欲せば版数の少きを選べ」と云う教訓を垂れているのかも知れない。

家

早川孝太郎氏は「三州横山話」の巻末にまじないの歌をいくつも掲げている。

盗賊の用心に唱える歌、——「ねるぞ、ねだ、たのむぞ、たる木、夢の間に何ごとあらば起せ、桁梁」。

火の用心の歌、——「霜柱、氷の梁に雪の桁、雨のたる木に露の葺ふき草」。

いずれも「家」に生命を感じた古えびとの面目を見るようである。こう云う感情は我々の中にもとうの昔に死んでしまった。我々よりも後に生れるものは是等の歌を讀んだにしろ、何の感銘も受けないかも知れない。あるい或は又鉄筋コンクリートの借家住まいをするようになっても、是等の歌は幻のように山かげに散在する茅葺屋根を

思い出させてくれるかも知れない。

なお次手に広告すれば、早川氏の「三州横山話」は柳田国男氏の「遠野物語」以来、最も興味のある伝説集であろう。発行所は小石川区茗荷谷町五十二番地郷土研究社、定価は僅かに七十銭である。但し僕は早川氏も知らず、勿論広告も頼まれた訳ではない。

附記 なお四、五十年前の東京にはこう云う歌もあつたそうである。「ねるぞ、ねだ、たのむぞ、たる木、梁も聴け、明けの六つには起せ大びき」。

続「とても」

肯定に伴う「とても」は東京の言葉ではない。東京人の古来使うのは「とても及ばない」のように否定に伴う「とても」である。近來は肯定に伴う「とても」も盛んに行われるようになった。たとえば「とても綺麗」、「とてもうまい」の類である。この肯定に伴う「とても」の「猿蓑」の中に出ていることは「澄江堂雜記」（隨筆集「百艸」の中）に弁じて置いた。その後島木赤彦さんに注意されて見ると、この「とても」も「とてもかくても」

の「とても」である。

秋風やとても芒はうごくはず

三河、子尹

しかしこの頃又また乱読をしていると、「続春夏秋冬」の春の部の中にもこう言う「とても」を発見した。

市雛やとても数ある顔貌

化羊

元禄の子尹は肩書通り三河の国の人である。明治の化

羊は何国の人であろうか。

丈艸の事

蕉門に竜象の多いことは言うを待たない。しかし誰が最も的々と芭蕉の衣鉢を伝えたかと言えば恐らくは内藤丈艸であろう。少くとも発句は蕉門中、誰もこの俳諧の新発知しんほつちほど芭蕉の寂びを捉えたものはない。近頃野田別天楼氏の編した「丈艸集」を一読し、殊にこの感を深うした。

前書略

木枕の垢や伊吹にのこる雪

大原や蝶の出て舞ふおぼる月

谷風や青田を廻る庵の客

小屏風に山里涼し腹の上

雷のさそひ出してや火とり虫

草芝を出づる螢の羽音かな

鶏頭の昼をうつすやぬり枕

病人と撞木に寝たる夜寒かな

蜻蛉の来ては蠅とる笠の中

夜明けまで雨吹く中や二つ星

楳の火や暁がたの五六尺

是等の句は啻ただに寂びを得たと言うばかりではない。一句一句變化に富んでいることは作家たる力量を示すものである。几董輩の丈艸を嗤またっているのは僭越も亦甚しいと思う。

一 夏目先生の書

僕にも時々夏目先生の書を鑑定かんていしてくれろと言う人がある。が、僕の眼光ではどうも判然とは鑑定出来ない、唯まっかな贗にせものだけはおのずから正体を現してくれ。僕は近頃その贗せものの中に決して贗せものとは思われぬ一本の扇に遭遇した。成程なるほどこの扇に書いてある句は漱石と言う名はついていても、確かに夏目先生の書いたものではない。しかし又句がらや書体から見れば、夏目先生の贗せものを作る為に書いたのではないことも確

かである。この漱石とは何ものであるか？ 太白堂三世村田桃隣も始の名はやはり漱石である。けれども僕の見た扇はさほど古いものとも思われない。僕はこの贋せものならざる贋せものと呼ばれる扇の筆者を如何にも気の毒に思っている。因ちなみに言う、夏目先生の書にも近年はめつきり贋せものが殖えたらしい。(大正十四年十月二十日)

二 霜の来る前

毎日庭を眺めていると、苔の最も美しいのは霜の来る前、——まず十月一ぱいである。それから霜の来る前に「カナメモチ」や「モツコク」などの赤々と芽をふいているのは美しいよりも寧ろもの哀れでならぬ。むし（同年十一月十日）

三 澄江堂

僕になぜ澄江堂などと号するかと尋ねる人がある。なぜと言うほどの因縁はない。唯いつか漫然と澄江堂と号してしまったのである。いつか佐佐木茂索君は「スミエと言う芸者に惚れたんですか？」と言った。が、もちろん勿論そんな訳でもない。僕は時々本名の外に入らざる名などをつけることはよせば好かったと思っている。(十一月十日)

四 雅号

しかし雅号と言うものはやはり作品と同じようにその人の個性を示すものである。菱田春草は年少時代には駿走しゅんそうの号を用いていた。年少時代の春草は定めし駿走しゅんそうらしかつたであろう。そう言えば正宗白鳥氏も昔は白塚はくちようと号していたかと思う。これは僕の記憶違いかも知れない。が、若しも違っていないとすれば、この号も兎に角年少時代の正宗氏を想わせるのに足るものである。僕は昔の文人たちの雅号を幾つも持っていたのは必しも道楽

に拵こしらえたのではない。彼等の趣味の進歩に応じておのずから出来たものと思つてゐる。(同前)

五 シルレルの頭蓋骨

シルレルの遺骸は彼の歿年、——千八百五年以来、ちやんとワイマアルの大公爵家の霊廟に収められていた。が、二十年ばかりたった後、その霊廟を再建する際に頭蓋骨だけゲエテに贈ることになった。ゲエテは彼の机の上上にこの旧友の頭蓋骨を置き、「シルレル」と題する詩

を作った。そればかりではない。エエベルラインなどは御苦労にも「シルレルの頭蓋骨を見守れるゲエテ」とか何とか言う半身像を作った。けれどもこれはシルレルではない、誰か他の人の頭蓋骨だった（ほんとうのシルレルの頭蓋骨はやっと近年テュビンゲンの解剖学の教授に発見された）。僕はこういう話を読み、悪魔のいたずらを見たように感じた。他人の頭蓋骨に感激したゲエテは勿論滑稽に見えるであろう。しかしその頭蓋骨がなかったとしたらば、ゲエテ詩集は少くとも「シルレル」の一篇を欠いていたのである。（十一月二十日）

六 美人禍

ゲエテをワイマアルの宮廷から退かせたのはフォン・ハイゲンドルフ夫人である。しかも又シヨオペンハウエルに一世一代の恋歌を作らせたのもやはりこのフォン・ハイゲンドルフ夫人である。前者に反感を抱いた女性は彼女の外になかったらしい。後者に好感を与えたのは勿論彼女一人である。兎に角両天才を悩ませただけでも、ただの女ではなかったのである。現に写真に徴すると、

目の大きい、鼻の尖った、如何にも一癖ありげな美人である。(二十一日)

七 放心

僕は教師をしていた頃、ネクタイをするのを忘れたまま、澄まして往来を歩いていた。それを幸いにも見つけてくれたのは当年の菅忠雄君である。しかしその後学校へ行ったら、今度は物理の教官が一人、カラアをつけるのを忘れたと見え、ネクタイだけシャツにぶら下げている

た。どちらがはた目には可笑おかしかつたかしら。(二十二日)

八 同上

僕は菊池と長崎へ行つた時、汽車中大いに文芸論をした。そのうちにふと気がついて見ると、菊池はいつか両手の間にパラソルを一本まわしている。僕は勿論「おい、君」と言った。すると菊池は苦笑しながら、隣にいた奥さんにパラソルを返した。僕は早速さつそく文芸論の代りに菊池

の放心を攻撃した。菊池の降参したのはこの時だけである。が、長崎を立つ段になると、僕自身うっかり上野屋へ雨外套を忘れて来てしまった。菊池の嬉しがるまいことか、忌々しくも大笑いをして曰、「君も亦細心または誇れないね。」(同上)

日本文学電子図書館

「芥川龍之介随筆集」

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

2014年3月14日 第1刷発行



日本文学電子図書館